

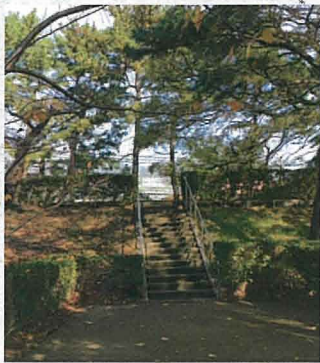
処女墓の行方

葦屋あしのやの うなひ処女おとこの 奥津城おくつきを

往むかき来きと見れば 哭なのみし泣なかゆ

(巻九—一八一〇)

この歌は、高橋虫麻呂歌集所出の「菟原処女の墓を見たる歌一首并せて短歌」と題される短歌の一首目です。その長歌には、菟原うなひ壯士むすこと血沼ちぬ壯士むすこの二人の壯士が処女をめぐって死闘を繰り広げ、そのことを苦に処女は自ら命を絶ち、



処女塚古墳

続いて二人の壯士たちも処女を追って死ぬという、悲劇の伝説が詠まれています。右の歌には、菟原処女の墓（奥津城）を往来する時に立ち寄って見ると、その悲劇に声を出して涙することだとうたわれています。

菟原処女の伝説を詠む『万葉集』の歌々は、処女の墓から伝説を懐古し、その悲劇に涙しています。処女たちの墓は、伝説の内容を歴史的に保証する記念物であり、その墓を起点とすることで、伝説はくり返し再生されるのだといえます。

この虫麻呂歌集の長歌には、「処女墓 中に造り置き 壯士墓 此方彼方に 造り置ける」とあるため、私は亡くなった処女の墓を中央に、壯士の墓をすぐ両隣に造り置いたのだ、と思っていました。ところが、菟原処女の墓と伝えられる、神戸市東灘区の処女塚古墳を訪れてみると、壯士たちの墓はそこから東西約二キロメートルほど離れた場所に、処女の墓を挟むように位

置していました。菟原壯士の墓は東求女塚古墳として、血沼壯士の墓は西求女塚古墳として伝えられています。確かに、処女墓を中心に「此方彼方に造り置ける」位置関係でしたが、三人の墓が隣接しているという思い込みを、痛く反省しました。

この三つの古墳は、三世紀後半から四世紀後半にかけて造られたもので、伝説のように三人の死と同時に造られたものではありません。また、『万葉集』に詠まれている「処女の墓」が、この古墳であるという確証もありません。ですが、この「処女塚」は江戸時代の『摂津名所図会』にも取り上げられるこの地方の名所旧跡で、永く『万葉集』や『大和物語』にみるような伝説が語り継がれていた土地であることには違いありません。私たちが万葉故地をめぐるのと同様、古代の人々も、遠い昔の人々が歩んだ心の歴史に、思いを馳せていたのだと思います。

(万葉文化館主任技師・大谷歩)